



**Simon & Garfunkel  
Web Forum  
Off-Line Meeting  
2013**

# MENU ■本日のメニュー

## ■ オープニング

## ■ こうもり夫婦&松月

America, Keep The Customer Satisfied, Duncan, El Condor Pasa,  
Bridge Over Troubled Water

## ■ BP & MEVA & KAZU

The Boxer, He Was My Brother

## ■ 大口さん

Kathy's Song

## ■ 老人の会話 朗読会

## ■ イッシーさん

Run That Body Down, Baby Driver, Old Man, All I Know, Song For The Asking

## ■ 自己紹介

くまさん、チアキさん、Chieちゃん、島田さん、大岡さん、ようこそさん、  
Gachaさん、うらうめさん、ほか

## ■ 安藤さん

Wednesday Morning, 3.A.M, Homeward Bound, Scarborough Fair

## ■ 藤井夫妻

Mrs.Robinson, American Tune, I Am A Rock, Leaves That Are Green, Old Friends

## ■ けんさん

Flowers Never Bend With The Rainfall, Feelin' Groovy, Peace Like A River,  
Paranoia Blues

## ■ ひろみつさん

Questions For The Angels, If It's Magic, Still Crazy After All These Years

## ■ S+G(えすたすじー)

Hey, School Girl, Tenderness, Fakin' It, Overs, Anji, Why Don't You Write Me

## ■ 湘南の若大将 & 健吾

For Emily, Whenever I May Find Her, Sound Of Silence, Red Rubber Ball, ほか

# 困難な時代に生きるということ

訳：えむばっし

## Living in Challenging Times

By Jerry Speyer 2008年

コロンビア大学ビジネススクール2008年MBA授与式のスピーチより抜粋

全文 url: <http://www4.gsb.columbia.edu/publicoffering/post/136565/Living+in+Challenging+Times>

Jerry Speyer氏はEnd Blindness 20/20プロジェクトの参加者であり、The Sanford and Susan Greenberg Prizeの共同設立者。ロックフェラーセンター、クライスラービル、Met Lifeビルなどマンハッタンのランドマークとして知られるビルの所有者として著名。



左から、サンディ・グリーンバーグ、アート・ガーファンクル、ジェリー・スペイヤー  
3人はコロンビア大学の同窓生

私の友人が、自身の人生の壊滅的な変化という現実に対処したか話したいと思います。

私の大学時代のルームメイトの一人はサンディ・グリーンバーグでした。彼はニューヨーク州北部のクリーニング店の息子で全額給付の奨学金を受けている学生でした。本当に素晴らしい奨学生でした。誰もが彼を愛し、称えました。

大学3年のとき、サンディは緑内障を患いました。医師は数週間以内に視力を失うだろうと言いました。サンディは大学を去り、バッファローの自宅に戻りました。

悲劇でした！ バッファローでは、サンディは籐椅子作りの技術を身につけられるかもと助言されました。

彼はこう対応したのです。次の学期にサンディは大学に戻りました。彼は盲目となり、ひどく恐れていましたが、自分は挑戦しなければいけないと話しました。すばやく技術を磨き、以前の彼のように高度な学術的な実績を挙げ、新しい生活に巧みに順応しました。

ある日、我々のもう一人のルームメイト、アートがサンディに、ダウンタウンに用があって地下鉄で行くんだけど、一緒に来る？と尋ねました。サンディは一緒に行きましたが、目的地に着いたらアートはこう言ったのです。「じゃあね、サンディ、寮で待っているから」アートは歩き去ってしまいました。サンディは視力を失ってから一人で地下鉄に乗ったことはありませんでした。

そのときのサンディの気持ちは想像すらできませんが、彼は自身の内側からまだ使っていなかった勇気を取り出し、やり遂げました。サンディは知りませんでした。もちろんその日、アートはサンディを置き去りなど決してしていませんでした。サンディがキャンパスに戻ったとき、アートは彼の肩を叩き、こう言いました。「君ができるのはわかっていたよ。僕は『君自身に』それができるって確信してほしかったんだ」



サンディがその瞬間アートに正確に何を言ったかは省略しますが、あえて言うなら彼らはそれを後には笑い話にしていました。

サンディはファイ・ベータ・カッパの資格を得て、コロンビア大学を最優等で卒業し、マーシャル・フェローシップとハーバードからのPhDを受けました。高校時代からの恋人と結婚し、ホワイトハウス・フェローとなり、3人の子供の父親に、インベーターに、会社のCEOに、ベンチャーキャピタリストに、大統領やホワイトハウスへのアドバイザーに、そして間抜けなインテリの歌手、その名はアート・ガーファンクルのビジネスマネージャーとなりました。そのときはもう、彼がサンディを地下鉄に置き去りにしたことを許していたからです。

この物語を話すのは、48年以上も私の心に残っているからです。挫折に直面したときの忍耐強さに感動し、インスピレーションを受けたからです。私にとって人生に、そしてビジネスにおいて大切に心に留めているすばらしい実例だからです。失敗を恐れるな。大きい夢を抱きなさい。そして最も大切なことは、逆境に邪魔をさせないように。



サンディ・グリーンバーグは毎晩教科書を朗読してもらうなど、失明後のアーティの支援に感謝して、奨学金を貯めてつくった貯金500ドルを、アーティのプロモーションレコードの製作費として貸し与え、それがSOSとなった、という逸話が [simongarfunkel.tumblr.com](http://simongarfunkel.tumblr.com) に掲載されている。

写真はアーティの後髪が刈り上げていない状況からみて、70年代のふたりと思われる。

# 冬のニューヨークでアーティ・スポットを 巡りましょう

Thread in New York City

文・写真 Chie

2013年2月14日、木曜日。3泊5日ニューヨーク出張の最終日。前日の夜、仕事は終わったので、今日は午後の飛行機に乗るだけ。せっかくなので、早起きしてプチ・アーティ・ツアーに行くことにしました。泊まっていたホテルは6番街沿い、ニューヨーク近代美術館とセントラル・パークの近く。空港に行くまでの2時間くらい取れるので、パーク・アベニューに寄ってからセントラル・パークに行ってみましょう。



まずは53番街とパーク・アベニューの角に。2002年のアルバム『Everything Waits To Be Noticed』に入っている「Thread」は、アートの詩を元にした曲で、パーク・アベニューに交差する道と年代を糸に見立てています。曲の始まりがこの角なわけです。

*“At the corner of 53rd and the summer of '62....”*

1962年、この近くのビルで、荷物の仕分けのアルバイトをしていたアーティの体験からうまれた歌詞です。iPhoneに入れていた「Thread」を聞きながら歩いてみます。前にここに来たのは、2000年の8月でした。わたしは大学生で、1年間の留学で初めてアメリカに来て、アーティのファンサイトで知り合った女性にニューヨークを案内してもらっていました。そのときはまだ『Everything Waits To Be Noticed』はリリースされていなくて、わたしたちはアーティの詩集『Still Water』を頼りに、パーク・アベニューを歩いていました。ワールド・トレード・センターが崩れ落ちる1年以上前のことです。当時はiPhoneなんてなかったし、MDにいろんなアルバムをダビングして持って行ったんだったわ・・・。



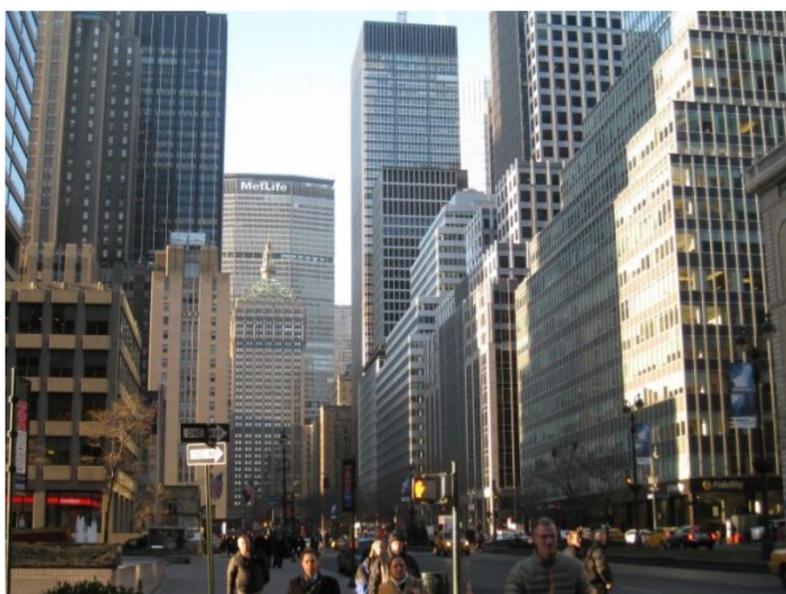
*“Seven years up the road and two blocks south...”*

パーク・アベニューを2ブロック南に行くと、聖バーソロミュー教会があります。高層ビルの谷間にある小さな教会で、1969年、「Bridge Over Troubled Water」のレコーディングがうまくいかなくて、アーティが気分転換に行く場所です。2000年に来たときはわたしも中に入って見たのだけれど、今日は入口が閉まっていたので通り過ぎます。



*“By the Waldorf Astoria at 49th and now...”*

さらにパーク・アベニュー1ブロック南に行くと、高級ホテル、ウオドルフ＝アストリア。アーティが主役の映画『ジェラシー』で有名(?)ですね。一部工事中のようでしたが、正面玄関はやはり壮麗です。



*“Your thread runs through / Park Avenue / Street of dreams and sorrow”*

パーク・アベニューに来ると、アーティがうつって内省的になりますね。しかしこの通りで「Thread」を聞くのはすばらしいです。また何年か後に来なくては。ここで北向きに折り返して、セントラル・パークに向かいましょう。



南側の5番街口からセントラル・パークに入って行きます。街中には雪はほとんどないのですが、パーク内は雪景色。南側から公園の中に入って池のほりを適当に歩いて行くと、おっと、いきなりウールマン・リンクが！アーティ出演の映画『愛の狩人』に出てくる野外スケートリンクです。映画であったように、スピーカーから音楽が流れて、柵の間からスケートをしている様子が見えます。セントラル・パークから見える街並みもきれいです。

このあたりに、“At The Zoo”の動物園があるはずなんですが、雪の中を歩いていたらだんだん冷えてきたし、そろそろホテルもチェックアウトの時間・・・ということで引き返しました。





アーティの家があるあたりまで行けなくて残念ですが、冬のパーク・アベニューも、セントラル・パークもいいですね！いくつもS&Gスポットを巡りたいならやはり歩きやすい春～秋が良いですが、冬のニューヨークもなかなかです。

時間がないけれど、ちょっとアーティ・スポットを巡りたいわ、と言う方におすすめのなんちゃってアーティツアーでした。お出かけの際は、携帯音楽プレイヤーに関連曲を入れていくのをおすすめします。

今回のコース(徒歩で2時間):

東53丁目 & パークアベニュー交差点 ☞

聖バロミュー聖公会教会 (パークアベニュー東50ー51丁目の間) ☞

ウォルドルフ・アストリアホテル (パークアベニュー東49ー50丁目の間) ☞

パークアベニューを戻り、東59丁目まで北上、左に曲がる(ウォルドルフ・アストリアから東51丁目を西に2ブロック行くと、5番街なので、こちらをThe Boxerを歌いながら北上しても可。ロックフェラー・センターが見えます) ☞

セントラルパーク(東59丁目と5番街の交差点) ☞

The Pond ☞ Wollman Rink



# ポール・サイモンの休息なき旅・2

## 訳：えむばっし

### Paul Simon's Restless Journey

By Nicholas Dawidoff August 25, 2011

Rolling Stone India掲載

元記事url:<http://rollingstoneindia.com/features/paul-simon%E2%80%99s-restless-journey/>

アルバム『So Beautiful』の新曲の一つは『Dazzling Blue』である。サイモンはこれは自身とイーディ・ブリケルとの結婚についての曲だと認めた。サイモンの曲の多くは状況が混乱していることを強調しがちだけれど、それは彼の昔の人生についての話なのだ。「僕は3回結婚したけど、今回は素晴らしい結婚生活なんだ。そろそろ19年になるし。僕は恋愛関係について何も知らなかった。単にうまくいくものなんだろうって思っていた。両親は幸せな結婚生活を送っていたからね。僕は自分の名声と富に惑わされてしまった。恋愛関係に時間をかけなかった。そして「うまくいこう」と思っていた。でもそうじゃなかった」

サイモンとブリケルはサタデー・ナイト・ライブで出会った。彼女はその回のゲストだった。ローン・マイケルズは「疑いなく二人は惹かれあってたね」と語った。その後、サイモンは彼女のパフォーマンスを見るためにボトムラインに行った。「皆彼女と話しながら引っこんでしまって、自分は間抜けな気持ちになってうろうろしていたんだ。ライブハウスを離れて、車に乗った。そこで僕は思ったんだ『どうして帰ろうとしているんだ？ 帰るために来たんじゃない』それで楽屋に電話をして彼女と話し、ショーの間に一杯やらないかって誘ったんだ。ヴィレッジの日本料理店に行った」最近二人はロレッタ・リンとコンウェイ・トゥウィッティのデュエット曲『You're the Reason Our Kids Are Ugly』のようなカントリー・ソングを一緒に歌っている。

ブリル・ビルディングのオフィスで、サイモンは古いステレオのスイッチを入れ、『Dazzling Blue』をかけた。人を『falling, flying or tumbling in turmoil』の状態にする愚かな恋のかつての表現に比べ、太陽がところどころ当たるような満足感を歌った今回の歌詞は抑制がきいている。しかしサウンドは挑戦的で、変化するリズム、テンポ、トーンの独創的な組合せだ。サイモンはステレオのリモコンを見つけられなかったので、曲の間に思いついたことがあるとその度にカウチからアンプへと急ぎ、途中のイスを機敏に避けて、ポーズを押して考えを説明した。その疾走は何度も起きた。彼は熱心に話した。「まばゆいばかりの青！ イーディの好きな色が青なんだ。これは本当に僕たち、イーディと僕との物語なんだ」サイモンは色あせた青色のシャツを着て、ジーンズをはいていた。彼は気づいた。「僕は全身青色だ！ いつもよりちょっと色を合わせ過ぎているね」

曲が『and dream our dreams of dazzling blue』の部分に差しかかると、サイモンは『dream』に反応して、「エヴァリーズみたいだ！」と叫んだ。歌詞は海にそびえる崖の描写に進み、ロングアイランドで夏を過ごすサイモンは、「モントークで僕たちはそこに住んでいるんだ」と話した。それ以外の時は、ブリケルが『田舎好き』のテキサス人なのでコネチカット郊外に暮らしている。最近、ポールがしたいのは多少の運動程度なので、スタジオに行ったり、息子の野球チームのコーチをしたりしている数年前、サイモンは新しいスポーツに手を染めた。クリケットだ。「僕は最終のバッツマンだった。丸一日待たなきゃいけないとは知らなかったよ」しかし結局はこれは問題ではなかった。サイモンがついにウィケットの前に立つと「僕は壁を越えて、教会の庭までかっ飛ばしたんだ」のだし、また「本当に大好きなジョー・ストラマーと午後ずっとしゃべっていたからね。彼が亡くなって本当にさびしい。やっと親しくなったところだったのに」



自分たちが定期的な不和の一つの最中にある間に、自身かガーファンクルに死が訪れうるのだ。ということについてサイモンは考えた。二人は何年間にもわたり、何度も和解して、結局は自分たちの怒りに座礁することをただ繰り返していた。1981年、映画『ワン・トリック・ポニー』の失敗を乗り越えるために、サイモンはセントラルパークでの再結成コンサートに同意した。コンサートには50万人が集まった。しかし数年後、再結成アルバムとして計画されていたアルバムからサイモンがガーファンクルのボーカルを消去し、ソロアルバムとして発表した時に、彼らの関係は酷い終わりを迎えた。また1990年、彼らがロックの殿堂入りした時に、ガーファンクルが壇上に立ち、サイモンに『私の人生をもっとも豊かにしてくれた人物です』と感謝を表したところ、サイモンが『アーサーと僕はほとんど何についても意見が合わないのですが、でも僕が彼の生活をかなり裕福にしたのは本当です。それは本当にそのとおりです』と皮肉で返した時、ガーファンクルは侮辱されたと感じた。翌年、サイモンがセントラルパークでコンサートを行ったとき、ガーファンクルは5番街の自身の部屋から観衆を見ることを避けるため町を離れた。タイムズ誌に彼は「僕は招待されるほど良くなかったんだろうね。そうすると彼の名声の感覚が傷つくんだと思う」と語った。

2001年、自身がロックの殿堂入りをした時に、サイモンは償いをしようとした。「アート・ガーファンクルに感謝しています。僕たちの友情の終わりを悔んでいます。僕たちが死ぬ前に、和解する日が来ることを願っています」とスピーチしたのだ。結局のところ彼らは仲直りし、2003年にはツアーを行い、2009年にはマディソン・スクエア・ガーデンでのロックの殿堂コンサートで感動的なセットを見せた。「真実を話すと、僕は本当にアーティと歌うのをとても楽しんでいるんだ。観客から自分たちはとても感情に訴えかけるものを受け取っている。関係はあのツアーの間に修復されたんだ。あのツアーは皆に大きな影響を与えたんだ。僕たちがつらい不仲の時期を経験した親友なんだって知っている人々にね。僕たちはこう言ったんだ。「人生はあまりに短い」その象徴的な意味が、似たようないざこざを抱えている人たちの心をちょっと打つんだよ」

いつまた二人が一緒に歌うのかというのは常に疑問として上っており、それを耳にするたびに、サイモンはガーファンクルとの口論を起こしてしまっていて、70年代の道のりにまた逆戻りしてしまうかもしれない、と動揺する。「一緒に働かないのはそれだけの理由があるんだ」と彼は話す。しかし常に引力はある。そしてガーファンクルが喉を損ね、1年以上歌うことから離れている現在、サイモンはその力をこれまでにならぬほど強く感じている。「彼に対する同情は別にして、僕はもし自アーティともう歌うことができなくなったら、どれだけ自分がつらいんだろうって考えるんだ」

アート・ガーファンクルは声を傷めているので、長い間は話せないと予告していた。しかし私がニューヨークの彼の広いアパートメントに入るとすぐに、私がデヴィッド・ボウイの音楽についてどう考えているか彼は知っていた。天国は彼のプラスチック・ソウルに場所を確保していると私は信じているからだ。ガーファンクルは遊び半分の議論を始め、ボウイは純粋なミュージシャンというよりはアーティストだと主張した。ガーファンクルは白いTシャツとジーンズを着用している。彼は今でもサイモンがかつて『君の物の見方は決して変えないで下さい。僕が干からびた気分になったら、立ち止まって君のことを考えます』と描写した、ハンサムな建築家志望者のようだ。

私たちは3階のガーファンクルの書斎にいた。そこには1129冊の本が読んだ順に書棚に並べられている。1969年、メキシコでキャッチ-22の自分の出るシーンを待つ間の時間をつぶすため、ガーファンクルは教養のある人が知るべき本を読むプロジェクトを開始したのだ。『The Oregon Trail』や『The House of Mirth』といった特にお気に入りの本の背表紙に、ガーファンクルはテントウムシのステッカーを貼っている。

ガーファンクルは今でもサイモンと密につきあっている。『明日に架ける橋』の40周年記念盤がリリースされるにあたり、新たに公開された古い映像について、彼は深い愛情をこめてこう語った。

「ポールとアーティ、二人の若造が仕事に向かう。僕たちは本当に仕事中毒だった。この男たちはお互い強い絆で結ばれ、お互いがなければ生きていけず、尊重しあっていて、称えあっていた。特別さの親和性。詩的だった」

ガーファンクルが自身とサイモンと出会ったときのことを描写しているのを聞くと、十代のポール・マッカートニーがジョン・レノンに自身をいかに売り込んだかを思い出させる。ガーファンクルはこう話す。「ポールは僕に出会ったとき、密かに僕の友情をものにしようとしていることを自覚していたんだ。僕はアマチュアの心理学者だけど、人生ってそういうものだよね。彼はいかした男の子で、僕はブロンドのご近所のシンガーだった。女の子たちは僕を好きだった。僕はいい子で、ママのお気に入りって感じだった。ポールは僕のユーモアセンスは最高だって気分させてくれた。僕たちの歩調が合った。通っていた中学はとてもみずぼらしくてね。仲間がいないとやってられなかった」自宅では彼らはガールフレンドを地下室の両端に連れ込んだ。そしてそこは二人が『リハーサル中毒』となって、夜明けまでハーモニーを響かせた場所でもあった。

『So Beautiful』を聞いた時、ガーファンクルは、『Questions for the Angels』に心打たれたと話した。ぼろぼろになった巡礼者(放浪者)が手遅れのように思われながらも、自分の居場所を探し求める曲だ。ガーファンクルは言う。「涙が浮かんだよ。でも彼本人は聖パウロではない。彼は競争心が強く、人を押しのける鋭い肘を持ったわがままな人間なんだ。人はポールにどう対応すればいい？ あの特徴は友人を失うのに一役買うだろうね」

ガーファンクルの数多い魅力のうちの一つは、有名になって長年を経ても、彼が未だに元の彼そのままだということだ。無防備で、見せかけが目につくこともない。彼の旧友の一人はこう話す。「彼はあらゆるものの中に本当の物事を探す。でたらめな人間じゃない。彼は本物をやるために生きているんだ。手品師のスモークやミラーで十分間に合う世界において、彼は真正なんだ。彼と働くのは楽しくてしかたがないよ。彼はそれだけ素晴らしいミュージシャンなんだ」私はガーファンクルに、サイモンが自身のギターピッキングについて話していたことを伝えた。「どうしたってソロではできなかつたろう。「やってくれよ、ポール」という誰かがいたからね。そうでなきゃできなかつた」ガーファンクルは眉をひそめた。「彼はミュージシャンとして素晴らしくセクシーなんだ。サイモン&ガーファンクルを形作る鍵は彼のギタープレイだ。実に快い。彼はいつだって軽視してきたけど。アコースティックギターをリズムに弾くんだ。彼よりうまくできる人を僕は知らない。『Mrs. Robinson』がヒットしたのはどうしてだと思おう？」

ガーファンクルはこう認めた。「ポールを好きでない人もいると思う。他の皆と同じように、僕たちにもある汚い面に気づくかもしれない。誰にでも魅力に欠けた側面があるんだよ。」彼は眼鏡を外し、静かに目を拭いた。少し間をおいてこう言った。「僕は良いレコード(Good Record)のために戦った。大文字のGで始まるグッドに、大文字のRで始まるレコード。そう、皆自分の欲しいもののために戦い、お互いの意見には大きな隔たりがあり、その意見は大文字のOで始まるオピニオンなんだ。意見対立にほとほとうんざりして、疲れ果てる。取り立てて変わった話じゃない。結婚じゃよくある話だ。皆それを少しずつ違う見方で見ると、そして皆、少しずつ違う見方で見るとにもうんざりする。サイモン&ガーファンクルに5年間いて、僕はポールから離れて休息をとる必要がある状態になった。あの決闘状態は僕をとことん打ちのめしていた。ただあの魅力的な場所におさらばしようと思ったことはなかった。僕にとって、構造の二重性は始まったばかりだった。僕はあのデュオに魅了されたままだ。あのデュオは、なんてお互いの才能が相補的だったんだろう」

ある日、サイモンをブリル・ビルディングのオフィスを訪ねると、私たちはキャッチボールをしに出かけることになった。サイモンはギターを右手で弾くが、野球場では別の手を使う。「父との思い出なんだけどね。僕は5、6歳で、父とキャッチボールをすることになった。父は僕にグローブを渡した。右利き用のグローブだ。僕はボールを投げる時にはグローブを外した。父は「ダメダメ、こうやらなきゃ」ついに父は家に戻って母に「ベル、彼は左腕投手だ！」と言った。ボールを投げるのは信じられないほど楽しかった。父親とキャッチボールをするのは、会話をすることと同じことだ。ボールが行ったり来たりするのは素晴らしい。



サイモンはこれまでの人生にわたってあまりに多くギターを練習してきたため、左腕は手根管症候群で手術を受けている。両肘に腱炎があり、両手は神経痛で疼くようになっていく。これにより、彼は戸外では本当に暖かい日にしかボールを投げられないことになる。肌寒い午後に、サイモンが上機嫌で屋内でプレイできる場所を見つけたと話したとき、自分は会議の直後に来て、ネクタイとドレス・シューズを着用していたが、あの声に抵抗できたことはなかった。



私たちはブリル・ビルディングを出て、コロニーレコードの前を通った。そのディスプレイ窓に、エルビス・プレスリー・ショーの古いポスターがあるのにサイモンが気づいた。横に寄せられて締められたプレスリーのベルトを指さし、サイモンはプレスリーをまねて、10代の頃の自分もああやってベルトをしていたと言った。車に乗り込み、脇道を通り、標示のない黒いドアの弟のエディ・サイモンが会員権を持っているヘルスクラブについた。デスクの男性がサイモンに「あなたがエディのお兄さんなのか！」と言った。

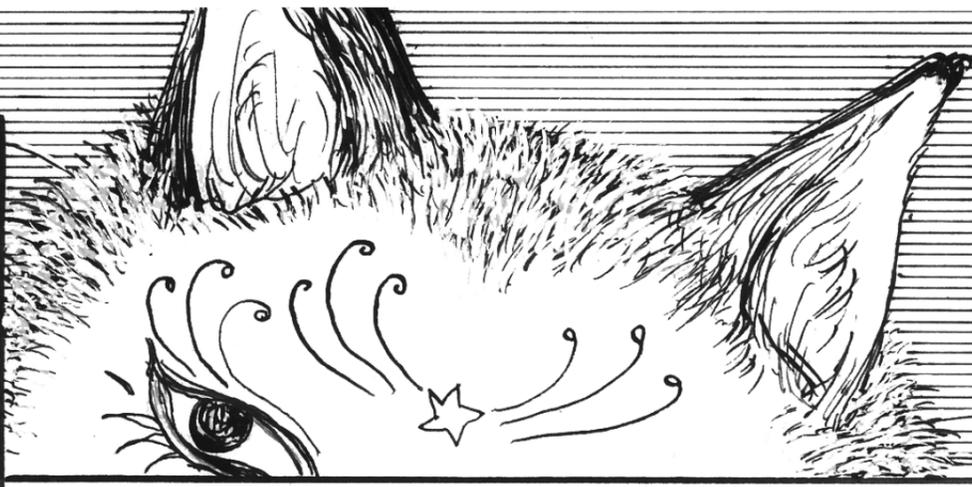
クラブ内のジムは壁に鏡が張られ、照明は柔らかく、健康的なオーラに包まれ、キューガーデンヒルのサウスポーが堅木の上を歩き回り、カーブを投げるのをやめるのを目にしても驚くようには見えない大勢の人がいた。サイモンはこう言った。「ここは薄暗いね」そしてナックルボールを試しに投げた。それから「投球は得意じゃないんだよ。僕はバッターなんだ！」

キャッチボールをすることについては、全てがリズムなのだ。誰とボールを投げ合っているかに関わらず、心はたゆたっていく。サイモンが速度を上げるにつれ、気がつくといつ私は彼の音楽が世界中を魅了し、イギリス人、アフリカ人、アトランティック市の保守派の男性、シカゴの株式仲買人、『サウンド・オブ・サイレンス』を大きな音で演奏する80歳の祖父と、そのピアノ用の長椅子の隣りに腰かけている6歳の孫娘達から愛されているのはなぜかを考えていた。ディラン以上、ジャガー&リチャーズ以上に、そのメロディは両親世代が好きなことを語り、それは今もそうなのだ。彼の悲しみをたたえた歌は誰もが避けられないものを我々に思い出させる。多くの人が正気を失ったような動きをしているが、それを鎮めるためにはちょっとしたものが必要なだけなのだ。

サイモンはすばらしい動きでボールを投げる。これまで私が彼に見てきたことはただひとつ、上限を超えるということだ。彼はかつて「自分はいつも、しようとしていることをまとめて単純化するんだ」と語った。彼の歌詞について、効果的にするための努力がいかに楽しみであり、挑戦であるかを話していた。最初は自分自身の人生について書いていたとしても、自身の経験をその正に本質まで要約していくことで、それらは神秘的にもソングライター自身よりはるかに素晴らしいなにかとして再び開くかもしれないんだ。

彼はこう言う。「できる限りシンプルにするんだ。複雑な物事を、可能な限りシンプルにする。もしそれができたら幸運だ。芸術において、僕の関心は美にある。僕のしていることが好きな人たちは美が好きなんだ。そして美しいなら、感情が開放されていることや、寛容さを生み出すんだ。そしてそれは作者が傷つきやすいということなんだよ」

あれこれ  
考えてみても  
始まらないわ



彼女は  
ぼくにこう言った

理論的に考えれば  
こたえは簡単よ



自由になろうって  
もがいている  
あなたに  
手を  
貸したいの

相棒を  
おいていく方法は



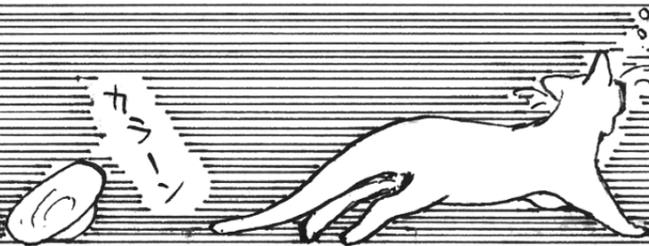
50もあるんだから

ぼくは言った

ありがとう  
感謝するよ



ぼくに教えてくれないか  
その50の方法を

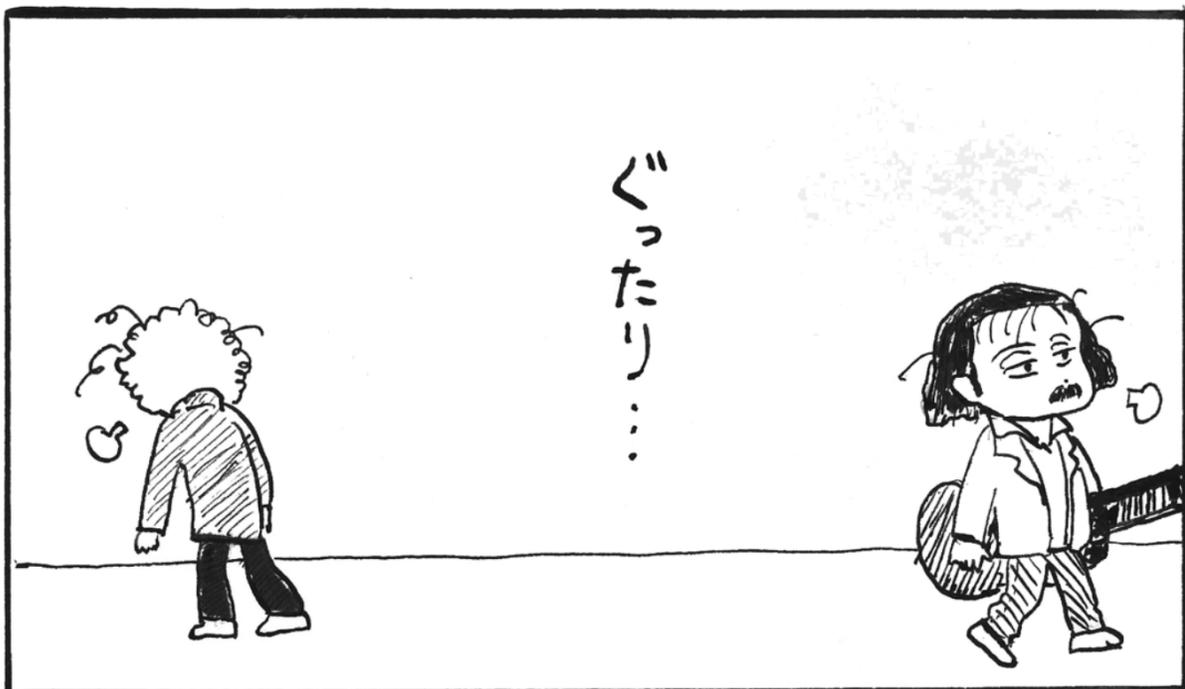
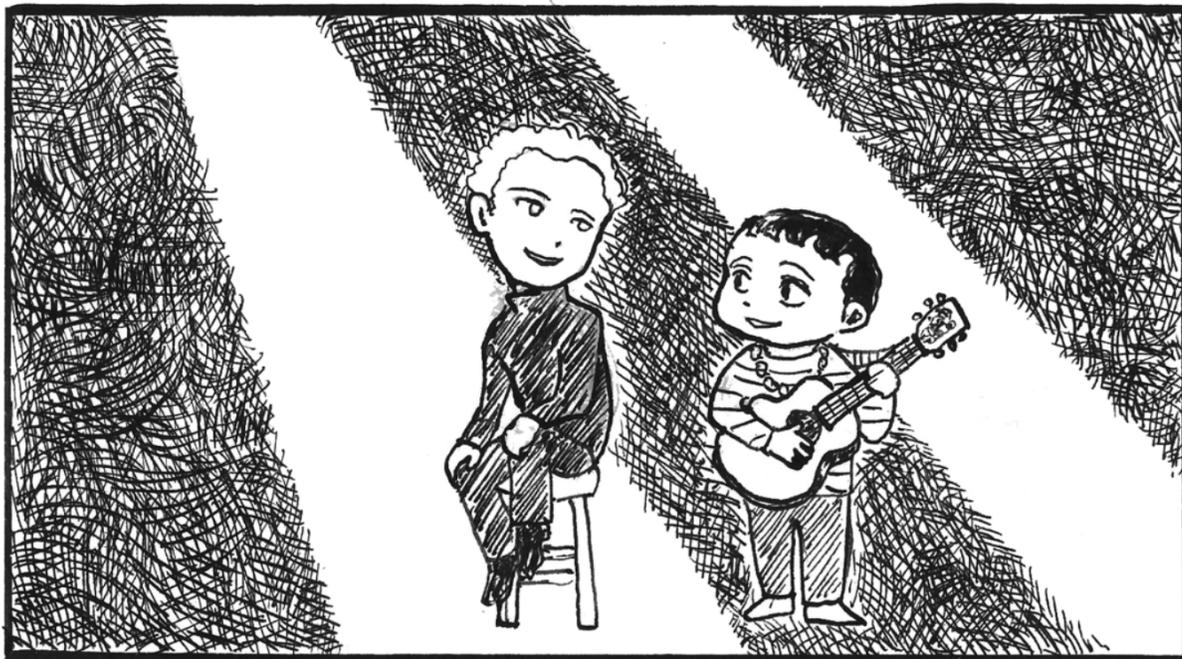
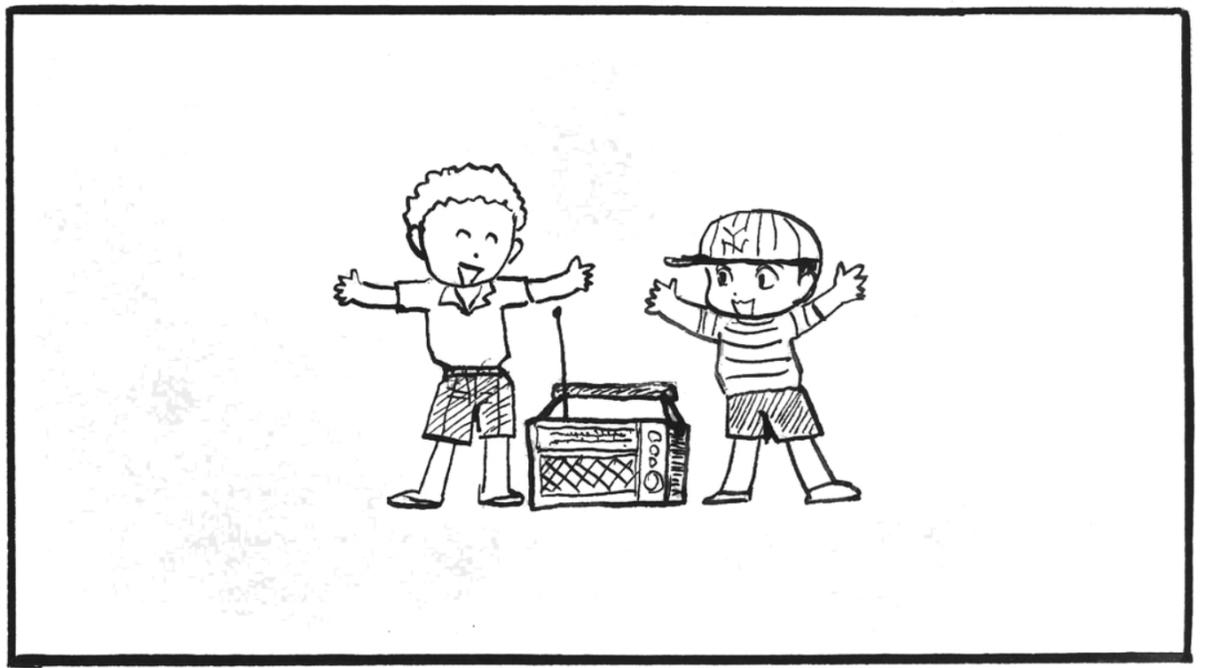


ロンベロ  
ちゃんのこと  
に  
外野が  
いるからなんだ  
よねー

アライストンは  
たまに言うけど  
金持たらしめだぞ  
まわりが  
騒がしい……

つづく

GACHA先生のマンガは巻末からはじまります!





[ introduction ] ♪||: ♪♪♪♪♪♪♪♪ | ♪♪♪♪♪♪♪♪ :||

序

トゥララ



ド(ッ)ツタタ

ドタタタ ドン



トゥラタタ



ド(ッ)ツタタ

ドタタタ ドン



トゥララ

ド(ッ)ツタタ ドタタタ ドン



トゥラタタ

ド(ッ)ツタタ  
ドタタタ ドン



♪~ン G6

♪~ン D6

♪~ン Cmaj7

♪~ン B7+5



♪~ン B7



♪~ン Em

互気投合

友情成立

SPECIAL ADVISER : イッシー・バッシーさん  
ご協力ありがとうございました。

# 相棒と別れる50の方法

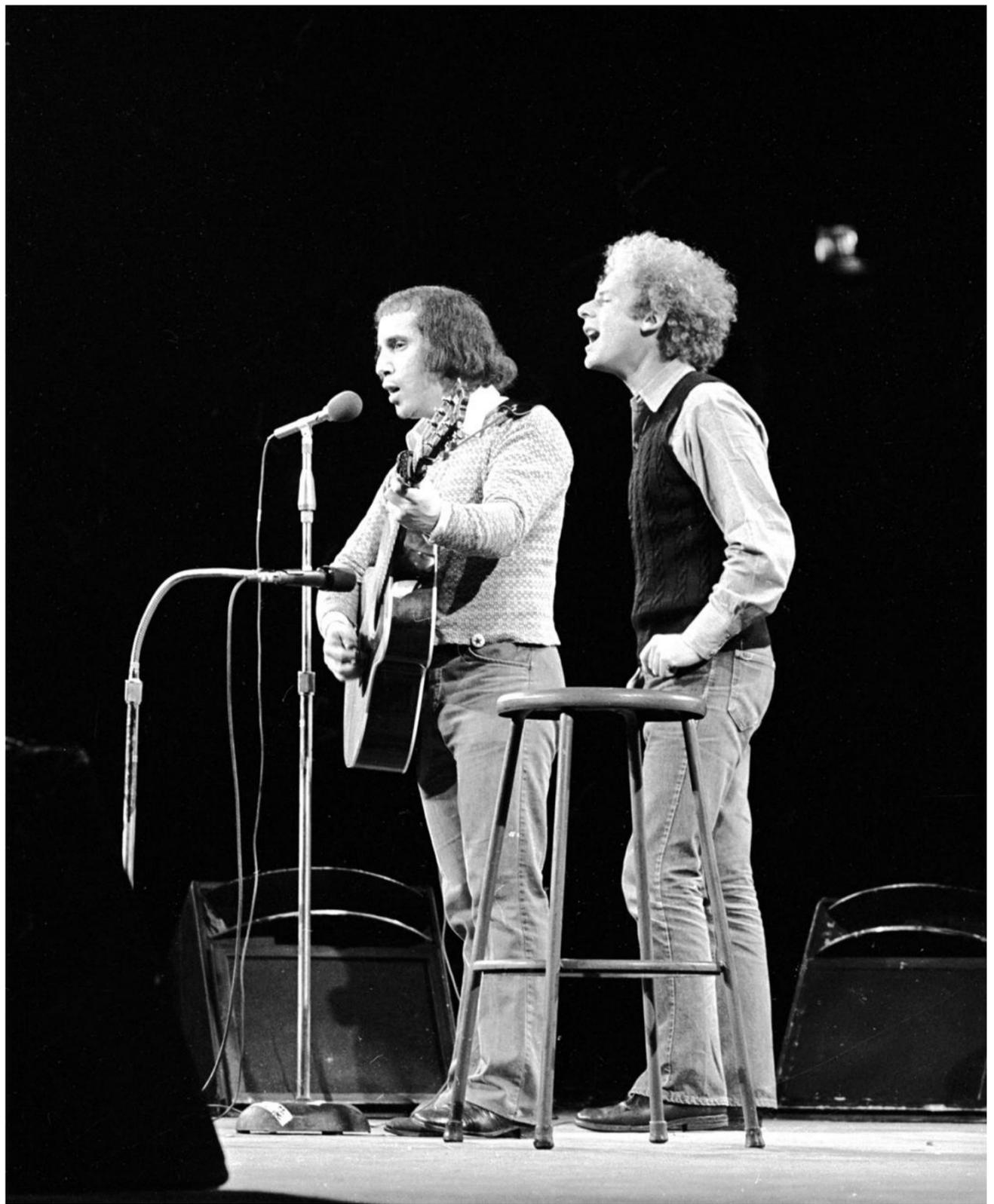


# 相棒とやりなす50の方法



GACHA







## **Simon & Garfunkel Web Forum Off-Line Meeting 2013**

2013年8月3日(土) 池袋西口 エールハウス  
<http://alehouse.hp.infoseek.co.jp/>